

機能的構音障害としての『側音化構音』になる子の指導

— その1 — 『側音化構音』の理解と子供の指導のあり方

天童市立津山小学校 梅村 正俊

はじめに

側音化構音の指導について、「音作りが難しい。」「時間がかかる。」「定着しにくい。」「3、4年生からの方が指導がしやすい。」と言われるようになって久しい。しかし、本当にそうなのだろうか？

しかも側音化構音というと必ずのように「舌の体操」が出てくる。本当に必要な指導なのだろうか？ これら一見まことしやかとも思える意見や指導に対し私見を述べたい。

I 機能的構音障害としての『側音化構音』の理解

下の表は、『側音化構音』と『発達途上に認められる構音の誤り』の誤り方についてまとめたものです。

誤り方	構音する音(例)	構音方法	聞こえ方(聴覚的印象)	誤り音の記号での表記	原因
側音化構音	[tʃ]や[kʃ]を構音する	舌を芋舌にしたり下顎を偏位させて音を出す	音が歪む。または、「tʃ」が「キ」のように聞こえる等	ない	不明 (舌が芋舌になる・下顎が偏位するは、原因でない)
発達途上に認められる構音の誤り	[s]や[k]を構音する	舌先を歯茎に付け破裂させて音を出す	「t」に聞こえる ※「t」は、発音方法と同時に音そのものを表記する	ある	不明

仮に、『側音化構音』において、「舌が芋舌になる」「下顎が偏位する」ことが原因で、「呼気が左右のいずれか側もしくは両側から出る」ために聴覚的印象として「音が歪んで聞こえる」「[tʃ]が「キ」のように聞こえる」と表現されるならば、『発達途上に認められる構音の誤り』においては、「舌が平になる」「舌先を歯茎に付け破裂させるように音を出す」ことが原因で、「呼気が正中より出る」ために聴覚的印象として「[s]が「t」のように聞こえる」と表現されることになります。つまり、「舌が芋舌になる・下顎が偏位する」「そのために呼気が正中から出ない」は、あくまでも側音化構音の構音方法の説明なのです。

「くつ」を「クツ」と発音するのはよく聞くことで、『側音化構音』は、この単語も含めてことばの教室の担当者となって初めて聞く誤り方と思われます。そのために、舌が丸まって芋舌になったり下顎を右や左に動かしながら発音する場面や表記しようのない誤り音を開くと戸惑ってしまうのでしょうか。

でも、発音器官や鼻咽腔閉鎖機能等に器質的な問題が無ければ、誰の「tʃ」であっても「tʃ」は「tʃ」です。「tʃ」が置換の「ki」になろうと、側音の「tʃ」になろうと、指導しなければならないのは、無声子音である歯茎破裂音の「t」なのです。だとすれば、『誤り方』である「置換」や「側音」によって、“（改めて）正しい”構音点指導の仕方が異なることの方が不自然だと言うことにはならないでしょうか。

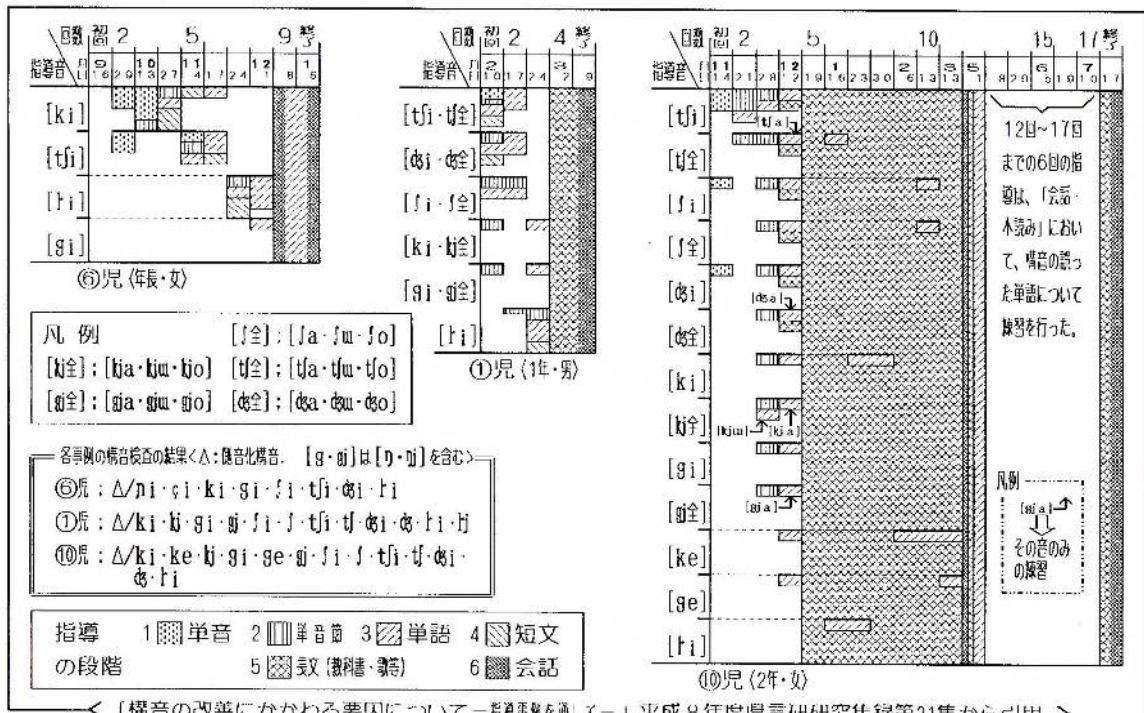
次ページの図は、小学2年生以下の子供の側音化構音への指導の経過概略です。

『側音化構音』『発達途上に認められる構音の誤り』に限らず、これまでの構音指導の経験上最も早期に終了したのが①児です。

つまり、「音作りが難しい。」「時間がかかる。」「定着しにくい。」「3、4年生からの方が指導がしやすい。」は、はなはだ疑問です。

ところで、『発達途上に認められる構音の誤り』は『早期発見・早期指導』なのに、なぜに『側音化構音』は早期指導ではなく『小学校3年生や5年生頃からは良い』のでしょうか。

『早期発見・早期指導』の目的は、言うまでもなく「2次的問題の発生を未然に防ぐ」ことにあります。しかしながら、まことしやかに提言される『小学校3年生や5年生頃からは』との発想は、「2次的問題の発生」を待って「子供が構音の誤りを自覚し悩んで困ってからのほうが指導しやすい」という『早期発見・早期指



導』の理念に背を向ける、いたって御都合主義的なそして非教育的な発想ではないでしょうか？

『早期発見・早期指導』を理念とするならば、それに見合った指導力を身に付けるよう努力するのが、子供側から考える我々の義務であり、責任だと思ふのです。言い訳のようによく言われる「様々な考え方がある。」は自己保身に過ぎないと感じるのだが、どうだろう。

『側音化構音』への指導は、「いわゆる幼児音」への指導と同じように幼児(年中)からでも指導はできるのです。

II 子供の指導のあり方

構音障害のある子の指導に限らず、吃音であれ、緘黙であれ、難聴であれどんな問題を抱えている子の指導であっても普段肝に銘じていることをまとめたのが以下の表です。

- 指導にあたって、まずは自己点検**
- ☆ 『子供を理解するために必要な情報』を充分得て理解しようとしていますか？
 - 親の主訴に隠れた主訴はありませんか？
 - 子供の喜怒哀楽・自己表出・自己決断は豊かですか？
 - 年齢相応の耐性は育っていますか？
 - 子供に『自分を変化させる力』は育っていますか？
 - 家庭や所属所で子供は透明な存在になっていませんか？
 - ことばの教室で子供を透明な存在にできていませんか？
 - ★ 子供が違うのに、同じ子供でも前回と今回とでは子供の内実は違うのに、ワンパターンな指導者の対応の仕方→「これからことばの勉強を始めます」等々
 - ★ 子供が目の前に一人しかいないのに集団に話しかけるような指導者の話し方、話しかけ方 等々
 - ★ 子供の何気ない仕種や表情の意味を感じ取れず、積極的(無視)に或いは消極的(気づかない)に対応し、指導者の都合を一方向的に与える指導 等々
 - ☆ 『構音指導そのものが解決の一つの方法である問題』は？ 構音指導の前に解決しておかなければならない問題は？ 構音指導しながらでも解決できる問題は？』の観点から指導方針を考えていますか？

—「構音指導そのものが解決の一つの方法である問題」イコール「構音の問題」ではない—
 - ☆ 『指導は、子供の姿が見えたときから始まり、子供の姿が見えなくなって終わる』この心構えでいつも子供と向き合っていますか？
 - 子供を育てる指導ではなく、構音障害への指導になっていませんか？

- 構音指導のプロセスで自信が培われ、自立・自律していく指導になっていますか？
- 「へたを誉める」から出発できますか？ ⇨ 子供は自分の発音が下手だとは思っていないのです
- 「誉められた実感」が、『ことばや表情に現れる』ように誉めることができますか？
- 子供との心的関係において『平行四辺形的関係・台形的関係』を敏感に感じ取りながら指導関係を調整することで子供を育てるような指導になっていますか？
- ☆ 『発語することが楽しい・発語することに自信がある・だから、もっと発語したい』の気持ちで子供は発語していますか？
- ☆ 子供が『自分を変化させる力』を十分に発揮できる関係になっていますか？
— ことばや新しい（正しい・普通の）構音を獲得するのは子供自身 —
- 指導者のことばを子供が主体的に受け入れてくれる関係になっていますか？
- ☆ 『子供と指導者が同じ目の高さで行う共同作業の結果として構音の改善が生じる』になるような関係の中で指導が行われていますか？

「ことばの教室で子供を透明な存在にしていますか？」から

子供の個性は百人百様です。1対1の指導では、指導者の個性が100%子供に影響を与えます。A君への対応と同じ対応をB君にしたら、B君にはそのように対応する指導者はどのように映るのでしょうか？

また、同じ子供だからといっていつも同じ『心の状態』で通級してくるとは限りません。前回指導を受けたときの印象、体調、出掛けの出来事等々の影響を受けて通級してくるのですから、前回と今回の『心の状態』が同じであるはずはありません。

毎回の指導の始まりは、これらのことに充分配慮して始められなければなりません。従って、指導は『子供の姿が見えてから、子供の姿が見えなくなるまで』が指導ということになります。ですから、この間の対応が「この子の今の状態がこうだから、この対応（指導）をする」でなければ、『この子』は指導者の目の前に居ないのと同じになります。にもかかわらず、誰に対しても、通級してくればいつも「ご挨拶は？」、指導の始まりはいつも「これから言葉の勉強を始めます。」のステレオタイプの対応では、自分の存在を認めてくれる大人（指導者）が目の前に居るとはとても感じてはくれないのではないでしょうか？

このような関係では、指導者のことばの影響を子供は受けるはずはないと思うのです。

『どのような目的で、どのような指導を、どのような関係の中で、どのように行うのか』に応じて指導の形式を瞬間瞬間に変化させ対応して初めて人を相手にした指導と言えるのではないでしょうか。

以下の文は、通級するお家の方へ配布した通級上の留意事項の一部です。

お家の方へ

幼児及び低学年の子どもさんのことばの指導は、遊びの雰囲気の中で行います。私たち大人もそうですが、緊張のある状態ではことばはうまく出てきませんし、ロレツが回らなくなることさえあります。

ちょっと考えてみて下さい。お母さんやお父さんは、赤ちゃんのとき「バ」や「マ」の練習や勉強をしてから「パパ」「ママ」が言えるようになったのですか？ 違いますネ。ことばや発音は、お母さんやお父さんのマネをして覚えていくものなのです。マネですから楽しくなければマネをしようという気持ちにはなれません。先生「教える人」、子ども「教えられる人」では勉強みたいでちっとも楽しくありません。ですから、遊園地に遊びに行く、ゲームをしに行く感じで連れて来てほしいのです。

遊園地に「お願いします」「ありがとうございました」などと言う人はいません。これらの言葉は子どもに緊張を強いる言葉ですから、ことばの教室では絶対に禁句です。「来たよ」「バイバイ」「よっ」で良いのです。ゲームに負ければ挨拶なんかしたくないのが普通の子供です。そんなときはふてくされたまま帰っても良いのです。無理矢理挨拶をさせようとするおじいちゃんおばあちゃんがありますが、ことばの指導の上では逆効果です。「お世話になってる」という大人の感覚を子どもには押しつけないようにお願いします。早く終了したい場合は、よくよく気をつけて下さい。

例えば、構音の問題のある子供の指導においては、『この先生とだったらまねっこが楽しい、この先生とだったらまねすることに自信がある、この先生とだったらもっとまねっこをしてみたい』の関係で指導が行われて初めて子供は、指導者のことばの影響を受けるのではないでしょうか。

子供が100人いたら100通りの、101人いたら101通り対応ができるようになりたいものです。

側音化構音への指導

赤ちゃんが言葉を獲得していくプロセスでは、生後2時間には母親の舌の動きの模倣が見られます。3～4カ月頃にはプレジャーサインと呼ばれる母親の発声とイントネーションの模倣が始まります。

これらの模倣の条件は、いずれも『母親との安定した心的関係』になっています。

構音指導も基本的には『模倣』です。そして、『模倣』は、子供の主体的な活動によって生じるのです。従って、子供と指導者が『どのような心的関係にあるか』に最も留意する必要があります。「指導者教える人、子供教えられる人」では、いくら程良い緊張関係であっても『模倣』は成立しないのです。

☆ 側音化構音への指導の第1の基本は、「模倣する主体は子供、主体的に活動（模倣）できるように育てたりその場を準備したりその条件を整えたりするのが指導者」を基本に構音指導を考えることです。

☆ 第2の基本は、「構音の獲得は、知的学習ではない」ことを肝に銘じておくことです。

☆ 第3の基本は、『芋舌や下顎の偏位』に惑わされないことです。

※ 機能的構音障害としての側音化構音の場合、『舌の体操』等舌の運動機能に関する指導及び訓練ははいっさい必要ありません。

※ たとえ [i] が側音化構音になっていたとしても | i | から指導する必要はないのです。

☆ 第4の基本は、子供は、『「ことば」を発するときの構音運動と、その「ことば」の持つ概念とは分化していない』ことを認識しておくことです。そして、このことは、どんな誤り音への指導でも基本となることです。

以下の表は、目的とする音が出そうで出ないときの指導を振り返るときの観点をまとめたものです。

☆☆☆ 目的とする音が出そうで出ないときの指導の点検の観点 ☆☆☆

- ★ 不用意に、親に指導を見せたり指導の様子わかる所に親を待たせたりしてはいませんか？
「指導への理解を得るために親に指導を参観させる」一見もっとも。でも危険！
- ★ 指導者の改善への熱意・意気込みを子どもにぶつけることが、構音を変にする！
- ★ 模倣関係が成立し、模倣を楽しんでいますか？ ☞ 台形的関係か？ 平行四辺形的関係か？
《ゲームやシールを必要とする関係？ 必要としない関係？》
- ★ 子どもにどんな概念の音を出させたいの？【「チを言って」と言われて言えるなら通わせる必要はない】
 - 「チって言って」の指示では側音になって、「ツイのチだよ」では普通の「チ」が言える子
 - 「ケって言って」の指示では「チェ」になって、「英語の [ke]だよ」では普通の「ケ」が言える子
- ★ 子どもは、何をどう模倣するかが分かっているの？
 - 理屈で理解させようとしていませんか？ ○ 分かりやすい口唇や舌の動きの提示になっていますか？
- ★ 誤り音の判断は、正確ですか？ 舌の動きや発語器官の形態を正確に把握して判断していますか？
 - 子どもが模倣した音を聞く場合、『誤り音』を基準にして聴いていますか？

終わりに

『側音化構音』というと、『初めて聞く誤り音の不可思議さと妙に丸まる芋舌や下顎の動き』に惑わされ、「こんな発音直るのだろうか？」との思いに直し方の方法を追い求めてしまっていることはないだろうか？

言葉や発音の獲得に関する発達の研究を紐解くとそこには、[i] の発音ができるようになってからイの段の発音ができるようになる、まして、『舌の体操』等舌の運動機能に関する指導もしくは訓練の後に側音化構音になり易いと言われる発音ができるようになるなどとの見解は見出すことはできません。

多くの子供の殆どは、周囲の大人、特に母親との安定した関係の中で母親の言葉の影響を受け傍目には一見自然に言葉や発音を獲得していきます。しかしながら、母親の音声や言葉を模倣する子供の様子をつぶさに観察すると、そこには、『模倣することが楽しい・だから、もっと模倣したい』という主体的にそして積極的に母親の音声や言葉を実に巧みに自己に取り入れようとしている子供の姿を見ることが出来ます。

新しい構音を獲得する主体は子供自身です。我々はその援助者に過ぎないこと自覚したいものです。